

## 大人専用保育園2 サンプル

「あおくん、お出掛けしましょう」

「うん」

「病院ですよ」

病院。予防接種か何かだろうか。インフルエンザとか——もしくは健康診断とかだろうか。

「忘れてしまいましたか？ あおくんが可愛くなる手術のお話を聴きに行くんですよ」

(あ……)

いや、忘れていたわけではない。単にこれだけ一緒にいても予約を入れている素振りがなかったから、忙しくてまだ先になるのかと思っていたのだ。

でも確かに思い返すとこの数週間やけに忙しそうにしていたと思う。休日もなくずっと仕事をしていたし、会社にいる時間も長かった。時折夜中に目が覚めても、隣にいないことすらあった。

(この日のために……)

副社長の仕事内容については詳しく知らないが、きっと時期的にも忙しいのだろう。その中で一日休みを取れるようにと頑張ってくれたのだ。嬉しい。

「あー。けーしゃ」

「はい、お着替えしましょうね」

ハイハイで近寄って手を伸ばすと、上条はそっと抱え上げてくれる。そして首に腕を回して着替えのために寝室へと移動した。

「病院はそう遠くはありませんよ。確認したところキッズスペースがあるそうなので、私が先生とお話をしている間はそこで遊んでくださいね」

寂しくないように連れてきました、と助手席に座る葵の上に乗せられたうさぎのぬいぐるみ。それを持って大人しく外を見ていれば、確かに病院はすぐに着いた。

「さあ」

その病院は駐車場から入り口まで、外の道路には面していない造りになっていた。きっと美容整形や男性器系の手術を行っている病院だからこの配慮なのだろう。皆が人に知られることなく通院することができる。

「こんにちは」

胸にうさぎを抱えたまま、上条に横抱きにされて病院に入った。入ってすぐには受付カウンターとベンチ。そこに下され受付をする上条の様子を見守る。

受付にいたのは男性だった。珍しい。受付は大抵女の人だと思っていたけれど、もしかしたらここは男性専門クリニックなのかもしれない。それなら女性がいないことも頷ける。

「上条様ですね。お待ちしております。ご案内致します」

辺りを見回しても誰一人いない。声も聞こえない。建物には誰もいないのだろうか。完全予約制なのか

もしれない。

キョロキョロしていると上条が背中に触れた。

「あおくん、抱っこしますよ」

入ってきたときも抱っこだったけれど、こうしてここでも抱っこなんて恥ずかしい。だって受付の人が見ているのに。

「あおくん、ほら」

膝裏に腕を差し入れられたので仕方なく上条の首に腕を回す。ふわりと浮き上がる身体。

「こちらです」

受付の男性はこちらを見ていたけれど、特に表情が変わることもなかった。足が悪くて歩けない人と思われているのかもしれない。病院だし。でもそれならいい。だってエイジプレイをしているなんて知られるのは恥ずかしい——うさぎのぬいぐるみは目についていないことを祈る。

案内された部屋は六畳くらい。四人掛けのテーブル。その奥にキッズスペースがあった。

「お子様は奥へどうぞ。ドクターを呼んで参ります」

「ありがとうございます」

お子様、と言った。ということは受付の人も葵が子供——エイジプレイ中——だということを知っているのか。それでもやはり受付の男性は何も気にした様子もなく部屋を出ていった。

分かっている。こういう仕事だからとボーカークフェイスが備わっているのだろう。けれど内心では驚いているかもしれない。引いているかもしれない。

顔が熱い。恥ずかしい。まさか知られていたなんて。こんなこと、担当医師や看護師以外には知られることなく過ごせるものと思っていたのに。

だって葵が子供をしているなんて誰一人知らないのだ。もちろんゆうあい保育園の園長にも丞にも何も言わずに退職したし、疎遠な家族や友人にも当然何も言っていない。

初めて誰かに知られてしまった。恥ずかしい——息が苦しいほどに恥ずかしい。

「あおくん、あおくんの好きな犬の玩具がありますよ」

しかし上条は気にする様子もなくキッズスペースに葵を下ろして玩具箱を見た。そして取り出される犬の玩具。上条が弄るとカチ、と音がして犬が歩き始めた。

アンツ、アンツ！

「あーう！」

可愛い、と思ってしまった。さっきまで恥ずかしくて消え入りそうだったのに。なのに目の前でトコトコ動く小さな犬がとても可愛くて羞恥を忘れてしまう。

葵は昔から子供や動物が好きだった。加えて上条に可愛がられるようになってからは好みまで幼児化したようで、可愛らしいものが更に好きになった。

「可愛いですね」

犬は鳴きながらトコトコと進んで行く。可愛い。家にも似たものがあるけれど犬種が違うし歩き方も違う。恐らくメーカーが違うのだろう。ここにあるのは首も揺れていて可愛い。

(可愛いなあ……)

本物の犬の方がもちろん可愛い。でも自分がお世話になっている身で犬が飼いたいなんで言えないし、それに上条が犬の世話をするのを見るのは嫌だ。犬が上条の顔を舐めるのも、甘えて擦り寄るのも想像するだけで嫌だ。かと言って自分一人ではお世話もできないだろう（できないというより大人の振る舞いを許されなと思う）し、そう考えるとやはり諦めざるを得ない。

「うー」

アンツ！ アンツ！

「あおくんは本当に動物が」

トントン――

ノックだ。上条が会話を切り上げ、葵の頭を一撫でしてから立ち上がる。

「はい」

「失礼します」

「ああ先生。今日は宜しくお願い致します」

「上条さん。こんにちは。葵くんは……ああ、わんちゃんと遊んでいるんですね。こんにちは。担当の大内です」

やはり大内という医師もエイジプレイを知っているようだ。挨拶を返すことはできないので、視線を犬に戻す。

「すみません、恥ずかしいみたいです」

「いえいえ。知らない人に突然声を掛けられたら驚いてしまいますよね」

大内も子供の扱いに慣れているタイプなのかもしれない。

そう言えば以前、上条はのんちゃんの病院に心当たりがあると言っていた。もしかしてここなのだろうか。それなら納得がいく。のんちゃんを手術した病院なら色々なプレイに理解があるだろう。

「さあ、お座りください。あおくんはお話が終わるまで遊んでいてね」

この生活になってから子供に対する言葉遣いをされたのは初めてだった。唯一葵に接する上条は以前からずっと敬語のまま。大内の子供扱いに少しだけドキリとしてしまう。

アンツアンツ！

まるで「かまって」とでも言うかのように犬が吠えた。意識を戻して頭を撫でると「あう」と声を変える。まるで本物みたい。可愛い。目も細めて気持ち良さそう。

「では始めましょうか」

「宜しくお願い致します」

犬も可愛いしたくさんかまってあげたいけれど、やはり意識は二人の方に向いていた。

「手術についてのご希望は……陰茎の短小化と性感の切除、睾丸摘出ですね」

紙を捲る音がする。要望を提出してある、ということだろうか。

「はい。その状態にしたい、というだけで手術方法に特別な希望はないのですが」

「そうですね……まず陰茎の短小化について、亀頭を含む先端側を切り落として半分にしても構わないとのことですが、それですとやはり見栄えが全く変わってしまいますし、何より子供らしい包茎ではなくなっています。そこまでバツサリとしなくても、睾丸の摘出をすると男性ホルモンの分泌が減って自然

と陰茎自体が小さくなっていきます」

「そうなんですか」

部屋は広くない。葵までしっかりと二人の会話は聞こえてくる。

「ええ。例えばいわゆるニューハーフの方。性感を残したいからと陰茎は残して陰囊だけを切除する方が多いのですが、その方々は確実に陰茎も縮小していつています。でも臈を作りたいと思う方はあえて陰囊の切除をしない方もいらっしゃるんですよ」

「と、言いますと」

「これは葵くんには当てはまらないから聞き流していただいて結構なのですが、臈を創る方法は二つありまして。陰茎を切り取ってその皮膚を使うものと、腸を一部切り取って使う方法です。腸を使うと最初は臭いが気になることもありますし、何より陰茎を使う方が性感に繋がりやすいので大抵の方はこちらを選ばれるんです。でも先に睾丸を取ってしまうと陰茎のサイズが小さくなって臈を形成するのに必要なサイズが取れなくなってしまうんです」

「そんなに小さくなるんですか」

「もちろん睾丸の除去だけではなく、女性ホルモンを摂取しているからというのもありますが——どちらにしても睾丸を除去することで男性ホルモンが少なくなってしまうので、葵くんも睾丸を除去するであれば女性ホルモンかもしくは男性ホルモンの摂取は必要となります」

「……難しいところですね」

「ええ、女性ホルモンを摂取すると次第に体つきは女性化していきます。丸みを帯び、体毛が減ります。一方男性ホルモンを摂取すると……これはまあ、今まで通り、ですね。性欲も維持されますし」

上条は真剣に聴いていた。

「どちらのホルモンを摂取するかはご検討いただくとして、睾丸の除去についてはよくある手術ですので問題ありません。見目を変えないようにシリコンボールの挿入も可能です。それから性感については……そうですね、考えられるのは前立腺の摘出。これを行うことで肛門性交を行っても前立腺で感じることはできなくなります。また尿道からの直接的な責めでも感じなくなります。前立腺の摘出と同時に勃起神経を除去することで勃起はできなくなりますが、ご心配でしたらやはり陰茎の所謂裏筋の除去をした方が良いかと思えます」

まあ、亀頭ごと切り落とすのでしたらそれで済みますが、と医者は上条が言っていたのと同じような説明を付け足した。

「そうですね。分かりました」

(え?)

もう質問はないのだろうか。葵の身体を変えてしまう手術だということにもっと色々……合併症とか後遺症とか、よく分からないけれど手術以外の問題についても言及してくれた方がいいだろうに。それとも身体さえ好みに変われば葵の苦痛は関係ないとも思っているのだろうか。

「では、一度陰部を拝見しても宜しいでしょうか」

「ええ、もちろんです」

くくく

身体に異変が起きたのは、その日の夜だった。

「さあ、おちんちんを綺麗にしましょうね」

相変わらず貞操帯に包まれたそこはオムツへの排泄のせいでひどく汚れてしまっている。

「大丈夫、痛くないですからね」

もう毎日のことなのに、それでも上条は毎回そうやって安心させようとしてくれる。優しい。優しくしてもらう資格なんてないのに。

「あう、けーしゃ」

上条はテキパキと貞操帯を外すとゆっくりと皮を剥いた。もう何か月も勃起すら許されなかったそこはそれだけで少しずつ硬くなり始めるのだけれど、なぜか今日は何も起こらなかった。

「……あおくん？」

上条も異変に気付いたらしい。普段なら皮を剥いて少しずつ形を変え始めたところで急いで冷水を掛けられるのに。

「……いいこですね。このまま洗ってみましょうか」

ついに勃起を忘れることができたのだろうか。上条がお湯のままのシャワーで剥き出しにされた敏感な亀頭を流すけれど、そこはピクリともしない。

「可愛いおちんちん……」

いやらしい言い方だった。それでもやはりペニスは動かない。その様子をしばらく観察した上条は、そのまま手に泡石鹸を出した。そしてゆっくりとカリや亀頭を清めていく。

「あおくんのおちんちんはとていいこになりましたね」

「あー」

洗い終えるまでじっと待つ。退屈だなど思ったけれど何もすることがなかったのだ。お湯に浸れば上条の用意してくれた玩具で遊べるけれど、洗い場には玩具が一つもない。

「さあ、綺麗になりましたよ。今日は硬くならなかったからすぐに終わりました。いいこでしたね」

「うー」

どうして勃起しなかったのだろう。そういえば全く興奮しなかった。勃起したいとは全く思わず、むしろ玩具を取ってほしいとさえ思っていた。

「さあ、身体を洗いますから少しだけ待っていてくださいね」

いつも通り上条が身体を清め、それから抱っこで一緒に入る。ここの家のお風呂には暖房がついているので待っていても寒くはならないのだ。

「あう、あー、あー」

「ああ、玩具ですね」

渡されたアヒルの玩具。でもよくある黄色い浮かぶだけのアヒルじゃなくて、これは卵に入っ

たアヒルだ。お湯に入れるとゆっくりと膨らんで卵の割れた部分から可愛い黄色が顔を出す。

「あー！ あうー！ あううー！」

見て！ という気持ちは伝わったようだった。上条がアヒルの頭を撫でる。

「可愛いアヒルさんですね。あおくんは本当に動物が好きで可愛い」

動物が好きな人というのは可愛いのだろうか。その理屈はよく分からないけれど、このアヒルは可愛いと思う。でもやはり、一番可愛いのはうさぎのぬいぐるみだ。

「あう、うー、うー」

「うー？」

「うー」

上条が苦笑した。きっと何が言いたいか分からないのだろう。

「……うー……なんででしょう。うさぎ？」

「あうー！」

「ああ、あおくんの大好きなうさぎさんですね。お風呂から出たら会えますよ」

濡れたままの頭を撫でてもらい、それから風呂から上がった。あまり長く浸かっていると暖房のせいもあってすぐに逆上せてしまうのだ。

「あう、うー！ うー」

「ああ、ダメですよ、身体を拭かないと」

上条はそう言うって追いかけてくるけれど、さすがに大人の身体なのでハイハイの状態から抱え上げられることはない。だからそのまま一目散にうさぎを目指した。

「うーー！」

うさぎはちよこんとソファに座っていた。

「うー」

「あおくん、ほら、身体がびしょびしょですよ」

心配すべきは身体じゃなくて床だろうに。でもこうして優先してくれるところが好きだ。

「……うさぎさんもあおくと離れて寂しかったみたいです。抱っこをしてあげましょうね。でもこのまま抱っこするとうさぎさんが濡れてしまいますから、あおくんの身体を拭いてからにしましょう」

相手が四歳くらいだったら百点の言い回し。けれどそれは一歳児には理解できない。髪からお湯が滴る状態の身体でぎゅっとうさぎを抱きしめる。

「あっ！」

「あー！！！！ やああああ！」

上条の声に驚いたんじゃない。うさぎの触り心地がいつもと違ったのだ。いつもならふわっと皮膚を撫でてくれるのにそれがなかった。

「やああ！ ああああ！」

「あおくんっ」

上条がうさぎを取り上げた。それも気に入らない。手触りが違うのも、取り上げられたのも全

部  
嫌。

「やあああああ！！！！！」

「あおくん、ほら、濡れてしまいましたよ。うさぎさんが風邪をひいてしまいます」

それも四歳なら通じただろう。でも葵は違う。そんなに大きい子供じゃない。

「やあああ！ あううう！！！」

くくくく

「あおくん、病院に行きましょう」

突然掛けられた言葉。撫でていたうさぎを持ったまま上条を見上げる。

「けーしゃ」

上条が目の前に膝をつき、そして頭を撫でてくれる。気持ちいい。つい目を細めてしまう。

「あおくん、今回はしばらく入院することになります。でも私もずっと一緒ですから寂しくありませんからね」

「けーしゃ」

病院、そしてしばらく入院。ということは何も聞いていない。先日上条が大内医師と話しているのを隣で過ごしていたのに仕事は大丈夫なのだろうか。けれど最近とてもゆったり

「……少し痛いけれど、一緒にいますからね」

「あう」

結局細かい手術内容については何も聞いていない。先日上条が大内医師と話しているのを隣でさりげなく聞いていただけだ。でもそれだって途中犬が鳴いたりしてしつかりと聞けていたわけではない。それに意味の分からない言葉も多かった。きっと上条は事前に調べていたから大内医師の専門的な説明でも理解ができたのだろう。

でも、分からなくてもいい。だって自分で世話をすることはないのだ。手術は医師がしてくれるし、そのあとのケアは上条が全てしてくれる。

「けーしゃ、すち」

「ええ、私も大好きですよ」

服を着せられて、またうさぎを持ったまま上条の横抱きで病院に入った。受付の男性も前回と同じ人。

「上条様、お待ちしております。ご案内致します」

今回通されたのは前回と違い病室だった。かなり広い部屋。まるで大部屋のような広さなのにベッドは部屋の最奥、窓際にかなり大きなのが一つあるだけ。その手前にはテーブルとソファ、テレビもある。それから冷蔵庫も。まるでホテルの一室みたい。

でも何より気になるのはキングサイズかと思う大きさのベッドに落下防止の柵がついていることと、壁一面に書かれた可愛らしい動物たちの絵だった。まるで小児科病棟。きっとここは小

児用の病室なのだろう。ベッドにはすでにぬいぐるみがいくつか寝転んでいた。しかもきちんと胸まで布団が掛けられている。

そのぬいぐるみの横に、上条は葵を座らせてくれた。

「ではドクターを呼んで参りますのでこちらでしばらくお待ちください」

そう言って受付の男性が退室する。その流れも前回と一緒だった。まるでトラウマになっているみたいに胸がドキドキしてしまう。その心情を察してくれたのか、上条が穏やかな声で話しかけてくれた。

「あおくん、可愛いライオンがいますね」

上条がベッドから一つ抜き取った。ふさふさの鬣のライオン。確かに手触りが良さそうで、手触りフェチの葵としてはつい触りたくなってしまう。

「あうー！」

「はいどうぞ」

上条に渡されたライオンのぬいぐるみ。病院の物は大抵皆に遊ばれてボロボロになっているイメージなのに、ここのは新品かと思うほど綺麗だった。そして手触りはやはりふわふわ。ずっと撫でていたい。

「可愛いライオンさんですね」

「うー」

ベッドの上を見るとまだ他にもぬいぐるみが置かれていた。すぐに目を引いたのは牛のぬいぐるみ。すごいチョイスだ。牛って。しかもライオンの横に寝ていたし。可哀想。食べられてしまいうかもしれない。

「もー」

「あおくん！ あおくんは天才ですか！？ そうです、もーですね。牛さんです」

上条が興奮したように言った。嬉しい。葵が幼い仕事をすればするほど上条は喜んでくれる。今はつい「もー」と言ってしまったけれど、今後はそれすら言えなくなりたい。これが何の動物かも分からないくらい幼くなってしまいたい。でも上条は褒めてくれた。それならこれくらいの意思疎通はしてもいいということだろうか。

「あう、あーう」

「あおくん、牛さんとライオンさんは一緒にすると可哀想かもしれません」

やはり上条も同じことを思っていたのだ。どう考えても牛が危険。けれどどちらの目も優しい目をしていた。

コンコン――。

突然聞こえた音に身体が跳ねた。そうだ、ここは病院だった。しかも前回失敗してしまった病院。上条がぬいぐるみを取られたから忘れていた。

(……あれ？ こんなに忘れっぽかったっけ……)

怖いと思った記憶はある。なのにいつの間にかその恐怖心を忘れていた。

「はい。どうぞ」

上条がドアに向かう。ベッドでぬいぐるみを抱いたまま視線だけで追う。

入ってきたのは大内医師だった。視線が合う。

(……………あ……………)

「葵くん。こんにちは」

大内は上条より先に葵に挨拶をしてきた。そしてゆっくりとこちらに歩いてくる。ちらりと黒目が下に動いた。ぬいぐるみを見ている。葵の腕の中の柔らかい鬘。取られる、と思ったのは無意識だった。

「やあー！」

ぬいぐるみは渡さない、とぬいぐるみを抱いた上半身を窓側にひねる。

「ああ、嫌われてしまったかな。葵くん、おじさんはぬいぐるみを取ったりしないから大丈夫だよ」

「やあー！」

「やあー！」

「葵くん、」

「やあー！」

いや、と首を振って上条に向かって手を伸ばす。抱っこしてほしい、腕の中に入れて守ってほしい。怖い。

「あおくん、大丈夫、先生は怖くないですよ」

「やあー！」

怖い。手術がどうかじゃない。だってそれは良く分からない。

(……………あれ？　なんで分からないんだろう……………そういえば何の手術をするんだっけ……………?)

今怖いと思っているのは知らない人、という印象が強いからだ。それにぬいぐるみを取られそうだから、それが嫌。取らないでほしい。

「あおくん、大丈夫」

上条は安心させるように抱きしめて頭を撫でてくれた。上条のことは信じているのに本当に大丈夫なのかと不安でシャツに縋り付く。

「随分可愛らしい赤ちゃんになりましたね」

「ええ、以前より更に可愛くなりました」

頭越しに二人が会話をしている。でも葵には関係がない。だってちゃんと上条の腕の中にいられているから。

「手術を終えたらもっと可愛くなりますよ」

「楽しみです。宜しくお願い致します」

「今日の手術のご説明は……………葵くんには」

「いえ、恐らく分かりませんから」

「……………そうですね」

話はまだ終わらないのだろうか。この人はいつまでここにいるのだろうか。早く上条と二人になりたいのに。

「葵くん、寝ている間にゼーんぶ終わっているし、起きたら上条さんが一緒にいるから大丈夫だよ」

急に話し掛けられ、逃げるように布団に潜り込む。だって葵が怖いと言っているのに上条は大丈夫と言うばかりで守ってくれそうにないから。

こんなに怖いのに。

(怖い……なんで……?)

どうして怖いのだろう。何かを忘れている気がする。

(何……?)

分からない。けれど怖い。忘れてるのが嫌な記憶だ、ということは何となく分かった。この人に関する嫌な記憶。

(何があった……?)

思い出せない。でもとても怖い思いをしたのだ。この人に与えられた恐怖ではない。

(間接的に……何か、上条に関する……)

「あおくん、出て来てください」

上条が呼んでいる……上条……けーしゃの声。

「葵くん、そのぬいぐるみを持って行ってもいいよ」

ぬいぐるみ。持って行っていくとは一体何のことなのだろうか。くれるということだろうか。

「あう？」

目から上だけを布団から出して二人を見る。二人とも微笑んでいた。葵が怖い思いをしているのに。でも何が怖いのか分からない。ただこの人——知らない男といると上条がいなくなってしまう気がする。

「けーしゃ」

「あおくん、ライオンさんと一緒に行きますか？ それともうさぎさんがいいですか」

「うー」

ライオンも可愛いしふわふわだけけれど、うさぎの方がいい。だってずっと一緒だから。寂しいときも、遊ぶときも、寝るときもずっと一緒。

「うさぎさんですね。じゃあうさぎさんと一緒なら頑張れますか」

(頑張る?)

一体何を頑張るのだろう。

「……さあ、あおくん、行きましょう」

上条が布団を剥いだ。けれどいつもの朝みたいだから怖くない。

「あう、けーしゃ」

「ええ、抱っこしましょうね」

腕を伸ばすときちんと抱いてもらえる。これもいつもと一緒に。場所がおうちじゃないけれど、けーしゃが一緒。

「あうー、あうー」

嬉しい。好き。けーしゃ。好き。

「……あおくん、可愛い。大好きですよ」

「あう、あー」

けーしゃがにこにこしてくれた。嬉しい。すき。

「すち、すーち。あー」

「可愛い赤ん坊ですね。さあ、一緒に行きましょうね」

廊下を出て、けーしゃが進む。どこに行くのだろう。お腹の上にはうさぎがいる。ベッドに行くのだろうか。もうねんねの時間？

「さああおくん、ねんねですよ」

やはりそうなのか。でも背中に当たるベッドの感触が違う。いつものお布団じゃない。けーしゃの匂いがしない。嫌なおじさんたちが変な機械を身体につける。いや。怖い。

「やあ！ やあああ！」

けーしゃが見下ろしている。なんで、抱っこ。手を伸ばしているのにどうしてけーしゃは抱っこしてくれないのだろう。いつもならとんとんしてくれるのに。

「やあ！ けーしゃ！ けーしゃああ！」

「あおくん、大丈夫ですよ。怖くないですよ」

「やああああ！」

顔が痒い。濡れている。なんで。けーしゃ、拭いて。拭いてけーしゃ。

「……上条さん、抱っこしてあげてください」

「いいんですか」

「ええ、落ち着かせてあげてください」

抱っこ、と聞こえた。

けーしゃが腕を伸ばしてくれた。嬉しい。

手を伸ばすと、けーしゃはちゃんときゅうしてくれた。

「けーしゃあ……」

「怖かったですね、すみません。大丈夫ですよ」

いつもの背中とんとん。よかった。けーしゃ。

「葵くん、これくんくんしてごらん」

緑色の変なものが目の前に差し出された。しようとしなくても勝手に匂いが漂ってくる。いい匂い。甘い匂い。アイスの匂い。

「ほら、いい匂いがするでしょ。あまーい匂い」

いい匂い。美味しい匂い。バニラアイスの匂い。緑色が鼻に近付いてくる。匂いが強くなる。いい匂い。

「そう、もう少しくんくんしてみようか」

本当にいい匂いだ。甘い。泣きすぎてちよつと鼻がダメになっているみたいだけれど、匂いはちゃんとする。もっと嗅ぎたい。

「うー、あ」

「そう、美味しいね」

「あう……あー……ん……」

※ ※ ※

「ではこのまま手術に入ります」

「はい。宜しくお願い致します」

くくくく

「あああああああああああ！」

「ああくんっ！」

突然聞こえた悲鳴。飛び起きて隣を見ると葵が暴れていた。

「あううう！！！」

「ああくん！」

目が覚めたのだ、とすぐに分かった。そして突然の痛みが暴れている。

即座にナースコールを押し、大内医師を呼んだ。

「ああくん、大丈夫、もう終わりましたよ」

必死に声を掛けるが、葵には聞こえていないようだった。きっと悲鳴にかき消されてしまっているのだろう。

「これほど苦しむとは、と思っていると足早に大内医師が病室へ来た。

「失礼します。葵くん、大丈夫、もう終わったよ」

「やあああああ！！！」

悲鳴だった。完全に悲鳴。

「……鎮静剤を投与します」

動きは早かった。一緒に入室してきた看護師に指示をして、薬剤が来るまでに脈を測る。

「……突然の痛みによるパニックでしょう」

「葵は大丈夫なんでしょうか」

「手術自体は成功しています。今は精神的なケアが必要です」

くくくく

ペニスには暴発寸前だけれど、それでもこの感触を敏感な指先でずっと味わっていたいとも思う。

「ちよっと奥に入れますね」

第一関節までしか入れていなかった指をゆっくりと押し進める。アナルは抵抗なく上手に拡が

ってくれた。

「痛みはありますか」

「ない！」

「そうですか」

元氣よく答えてくれたのが可愛い。その無邪気さを見ると、どうやら本当に痛みは感じていないらしい。

「ゆっくり中を抜けますね」

葵の身体を仰向きに変えてそのまま覆い被さる形に姿勢をずらし、動かしやすくなった指でピースを作るようにして内部を抜げる。

「あうう……」

「痛いですか」

「たい、ない……」

「なら、気持ちいい？」

「……ない……」

ならきつともどかしいのだろう。もしかしたら以前の性感帯の辺りに触れたのかもしれない。本来だったら気持ち良かったはずのところに触れられても気持ち良くなれなくて思わず声が漏れたとか。

「……そうですか。もうちょつと進めますね」

掛ける言葉は見つからなかった。

それから三十分。ゆっくり時間を掛けて丁寧にアナルを解した。

「あおくん、中に入らせてもらってもいいですか」

「けえしゃあ……」

葵はもう半泣きだった。きつと性感をなくしたことを痛感したのだろう。

「あおくん、まだおちんちんむずむずしますか」

「あう……」

「そうですか……早く全て忘れてしまえるといいですね」

約5万2千文字です。

宜しくお願い致します！